

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 NEVENA IVANOVA

イヴァノヴァ ネヴェナ

NEVENA IVANOVA (イヴァノヴァ ネヴェナ) 提出の博士論文『SHAPING SUBJECTIVITY: Time, Space and Mirror-Image in Electronic Art Practices (1960s-2000s) 主体性の造形：電子芸術実践における時間、空間及び鏡像』(英文 347 頁) は、1960年代か2000年代にいたる過去50年にわたる「電子芸術実践」における、時間、空間、鏡像の問題を、29件の作品例を題材に、美学、現代哲学の観点から分析して、メディア・アートの美学的経験において成立する、現在時、身体像、自己像、時空間経験について論じたものである。

論文は三部構成をとり、序章では、芸術史学の George Kubler の著作 *The Shape of Time* (1962)を援用することにより電子芸術における「presencing」をいう独自の概念を提案し、電子メディアをとおした「subjectivity」の形成を、「現在化 presencing」、「自己像反映 self-reflection」、「空間拡張 space expansion」を通した「主体性の形成 shaping of subjectivity」の問題として捉えるという本論での方法論を定めている。

第一部では、電子芸術の時間経験としての「現在化 presencing」に焦点を当て1960年代の Warhol の映像作品から2007年の Viola や Teshigawara にいたる作品における時間性の経験の変容を記述分析している。1960年代に世界の時間性が危機を迎えたことから、ビデオ・アートの実験作品の起源を説き起こし、高速ビデオ撮影による新しい時間経験の成立へと向かう、「現在化」の美学経験の変容が跡づけられる。

第二部では、電子芸術に現れる「鏡像 mirror-image」を取り上げ、Warhol、Nauman から Hentschläger、Shaw/Kenderdine にいたる作品における、自己像、身体像の感覚経験を分析している。Lacan の鏡像段階論にみられる像と自己との生成的な経験経験が、電子アート作品をとおして成立・変容する過程が個々の作品の分析をとおして解明される。

第三部では、電子芸術が実現する「時空の連続体 space-time continuums」の経験を、Davies から Bruyère にいたる作家たちの制作物を対象に論じている。電子アート作品が生み出す場と時の実験を、経験記述に基づいて分析している。

最後に、結論部では、現代の電子芸術が可能にした自己のテクノロジーの美学戦略の形態を、現在化のかたち、鏡像による身体経験、時空間経験の変容として総合して考察し、電子芸術の50年間の経験を自己の脱領域化のプロセスとして提示している。

また、当該論文には、扱われた作品の映像および作品経験、さらにソフトウェア *Lignes de temps* を使用した分析史料を記録したビデオ・アーカイヴがDVD一枚の形式で添付されている。

以上の Nevena Ivanova (イヴァノヴァ ネヴェナ) の提出論文であるが、現代の電子芸術作品を題材に、新しいテクノロジーによる現代作品が可能にした美学的経験を解明しようとする狙い、Heidegger の存在論から Kubler の芸術史学、Deleuze や Stiegler の現代哲学にいたる主要な理論書を駆使して新しい芸術経験が生み出す主体性、時空経験、身体像を分析する理論的・方法的探求、作品経験に関する記述の網羅性において、特記するに値する美学的研究となりえている。さらに、時には、自ら作家に取材インタビューを行うなどして、収集や体系的鑑賞が困難な現代作品に関するアーカイブを自ら作成して研究を進める実証的な方法態度は、著者の美学研究者としての十分な素養を示している。

他方、それぞれの作品の美的経験の記述がやや羅列的であること、序章において導入された方法論が、結論においては理論的に位置づけられずに終わっていること、電子芸術のテクノロジーについてのより詳細な分析に踏み込んでいないこと、Heidegger の存在論など哲学的言説に議論が寄りかかりすぎ、記号学や認知科学などのメタ言語を習得しえていないこと、など審査員からは、論考の弱点についての指摘も行われた。

しかし、本論文が扱ったように、現代の電子芸術をトータルな歴史的パースペクティブのなかで捉え、現代の哲学を含む、人文科学の主要な理論言説を縦横に援用しつつ、電子メディアの実験作品が提示する主体性の経験を、時間性の解明、自己像、身体経験の組織の分析、アートが実現するいままでにない時空経験の分析を通して、体系的に考察し、新しい美学的な総合にまでいたろうとする体系的な試みは、現在の美学研究においてもまだ多くはない。その意味で、本論文は先駆的な仕事と位置づけてよい。さらに、美学的経験の記述についても、文章による素描にとどまらず、ビデオ収録や映像分析のソフトウェアを活用するなどして、新しい研究方法を試みていることも評価できる。また、多くの理論文献を読みこなし、正統的な哲学概念を駆使して論を進めている点でも、学際情報学として成熟した博士研究の達成レベルを示すものである。

以上の諸点にもとづき、総合的に判断して、本審査委員会は、一致して、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。

平成 23 年 4 月 25 日

東京大学教授 石田英敬  
東京大学教授 吉見俊哉  
東京大学教授 小林康夫  
東京大学教授 田中 純  
東京藝術大学教授 藤幡正樹